

テーマ「バレエとわたし」

早稲田大学第二文学部 社会人間系専修 2年
西川 涼子

[テーマの動機]

私は、踊り全般に興味・関心がある。その中でも特にクラシックバレエについて一番深く興味を抱いている。バレエは私の人生の中で、なくてはならないものであり実際自分がどん底の時、心底辛かった時に救ってくれたのがバレエだった。でも何故このどん底の時に救ってくれたのがバレエであったのか。何か別のバレエ以外の他のものでも良かったのではないか。今回のレポートで私は、この問題を問題提起として掲げ、さらに自分にとってのバレエとはどういうものであるのかということも改めて考えてみようと思った。

何故このどん底の時、バレエでないとはいけなかったのか。他のスポーツやスポーツでなくても他のことでも解消できたのではないか。例えば一番手っ取り早いのが食べること。あと私は歌うことも大好きなので、カラオケとかでも良かったのかもしれない。その理由はおそらく、私が1番最初に習った踊りがバレエであったということ関係しているのかもしれない。他の踊りや他のものでは解決できなかった。そして、私とバレエの関係は恋愛、人間関係にも似ていると思う。私が最初に恋をした相手がバレエであり、いわば初恋の人なのである。何故バレエが好きなのか？と言われたら、本当のところよく分からない。それもまた恋愛感情と類似している。以上、このテーマを対話を通じてもう一度考え、更に自分自身とバレエを見つめなおしてみようと思う。その前に私とバレエの出会い、馴れ初めについて少し触れたい。

私がバレエを習い始めたのは小学校4年生の時だった。本当はもっと前から3歳ぐらいからやり始めていれば、もっと上手くなっていたのと思っているが、私の田舎はバレエ教室が近くになく、何とか町のバレエ教室までバスで1人で通わせられる年になってからではないと、駄目だと言われ続けていた。そして念願もってその夢が叶い、週にその頃は2回ほどだったか、楽しく通っていた。毎週土曜日が待ち遠しくて待ち遠しくて、仕方がなかった。また当時習っていた先生が大変綺麗な方で、その先生に会いに行けるだけでも嬉しかった。

それから2年後、私はバレエを受験でやめる日が来た。中学受験で合格したらまた通おうと思っていたが、あいにく私は受験に失敗し、バレエに行きづらくなり、そのまま辞めてしまった。というのも周りの教室の友達がだいたいの方は受験に合格し、私だけ取り残された感があったからだ。今考えるとそんなこと気にせずに、続けていればと思うのだが、その頃の私には、一緒にレッスンをするのが苦痛になっていた。本当に今思うとあのままやめないで続けていれば、もっと踊れるようになっただろうと後悔をしている。中学校3年間の一番上達する時期にバレエをやらなかったのだから。だけど、このやらなかった時

期は上達の意味での「後悔」はあるけれども、実際今考えるとさほど後悔はしていない。このやっていなかった時期があったからこそ、改めてバレエの大切さを知ることができた。

人間どんなに好きなものでもやめなければいけないときや、やめたくなることがある。飽きてしまったりだとか、他のものに関心がいったりだとか。身体上の理由でどうしてもやめざるをえなかったとか理由は様々である。だが、自分が本当に好きなものというのは、自分がどんなに離れていってしまおうとも、向こうからついてきてくれるものなのだ。恋愛も自分から好きだと言って、どんどん押していくと相手にひかれてしまう。だけど、自分がひいていくと、今度は相手が寄ってくる。

私は高校に入ってから、またバレエを再開した。その時に、「ああ。やっぱり私はこれしかない。バレエが1番好きなんだ」と悟ったのである。高校に入ってから私は部活動でまたダンスに接する機会に合い、ダンス部でストレッチなどをやるうちにもう一度バレエをまたしたいと思うようになっていた。中学時代は勉強ばかりで何も運動というものをろくにしてこなかったのが、最初は勘を取り戻すのが大変だったが、次第に踊るのがまた楽しくなってきた。しかしすぐにバレエを復帰したわけではなく、その頃の部活の仲間がやっていたジャズダンス、ヒップホップなどをやるようになっていた。でも他のダンスをやるうちにバレエの基礎の大事さを痛感し、ジャズダンススタジオのバレエレッスンを受けるようになった。その時、やっぱり私にはバレエが一番向いてるなと思ったのだ。やはり、1番最初に習った踊りというのは本当に自分の体に身にしみている、久しぶりでも体は正直で、やっと戻ってきてくれたんだね。これからは離れないでね。と言っている。更にその頃の私は、大学受験や将来の不安に毎日押しつぶされそうになるくらい悩んでいた。それを助けてくれたのがバレエだったのだ。不思議なことにバレエのレッスンを再開した途端、悩んでいるものが吹き飛んでいったのだ。全部ではないのだが、今までもやもやしていた何かを取り除かれたような気がした。でも何故この時バレエではないといけなかったのか。そのことについて、次は対話を通じて考えてみることにした。

[対話報告]

対話はこの授業の同じグループであるHさん(仮名)を対話相手とした。対話はメールでのやりとりであった。内容は、以下の通りである。

対話1. バレエのイメージ

Hー私にとってのバレエのイメージとは、お嬢様・お金持ち・上品な家庭、またはそうあろうとしている人たち。意地悪い言葉で言えば、優越感・上流・上昇志向・・・という言葉が思い浮かびます。そう聞いていかがですか？西川さんにとって、バレエのイメージとは？

私ー私にとってのバレエのイメージとは、実際やっているなかにいるのであれかもしれませんが、事実金持ちが多いのは確か。だけど、最近は大人から始める人も増えて、そういう人たちは自分で稼いだお金でやっているの、そんなにすごいお金持ちというふうには見受けられません。小さい頃からやっていて、コンクールに出るほどの人だと、お金も持ってないとできません。パドドゥ(男性と2人で組んで踊る踊り)など踊る際、男性にまずお金を30万くらい払い、さらにその男性の交通費や宿泊費も女性負担ですし、先生に見てもらってレッスン費も別にかかります。プロならまだしもアマチュアの世界のバレエは本当にお金がかかります。プロでも日本はそんなに食べていける人はごくわずかという厳しい世界です。ごめんなさい。話が逸脱しましたが、私が持つバレエのイメージはそんなにお金がかかるのにやるのにはわけがあります。実際他のダンスももっとお金がかかったりしますし、バレエは踊りの中で一番古典で、なんといっても格式高いイメージがあります。自分がちょっと上流階級にいるような錯覚を起こしてしまいます。また舞台上で身にまとう衣装も、本当に自分が姫にでもなった気がします。クラシックバレエは、踊りの中で一番難しい。というのが私のバレエに対するイメージというか見解です。

対話1で気づいたことーバレエの世界を全く知らないHさんと、私であったが、どちらもそんなにバレエに対するイメージはかけ離れていなかった気がする。

対話2. 何故バレエが好きなのか

Hー好きなことって、何かを忘れるためにやるものですか？なんだか、つらい経験をしていて、それからの逃避行動として、すがりつくような気持ちでやっているように思いました。「心底辛かった時」と書いてありますね。辛いときに気分転換を求めることはわたしにももちろんありますが、文章全体に、頑張ってる西川さんはイメージできても、バレエの楽しさは具体的には伝わってこない。たとえば、「自分が白鳥になりきっているのです」とか「衣装がすてき」とか「くるくるまわれると楽しい」とかすごく単純な言葉でストレートにバレエを表現する言葉はないですね。「バレエとわたし」というタイトルだったら、ただただポジティブにバレエって楽しいから好き！という文章になった可能性もあるわけですね。今までの経緯はさらっと書いて、今感じている楽しさに重点を置く文章になった可能性もあった。簡単に言えば、文章全体が重い感じがしました。(これは、批判ではなくて、そういう文章を書く西川さんの状態を感じた、ということです。

そして、あくまでも、私が感じた「感じ」なので、とんちんかんな事を言っているかもしれない) 文章を書き換えろ、という意味ではありませんよ。(念のため) こう言われてどんな感じがしたかをお返事ください。もちろん反論！してくださいね。

いいわけも OK ですよ。

私— 辛かったからバレエをやるのはちょっと違うんです。辛いだけなら、飲んだり食べたり、もしくは友達にぐちったりもすると思うんです。だったら何で？という話になります。たまたまバレエを1時期やめて、高校時代にダンス部で活動し、外ではジャズダンスを習っていました。だけど、それはそれで楽しいんだけど、なんか合わない？なんか違うかな？とっていたわけ。それで、そのジャズダンススタジオのクラスにバレエのレッスンがあって、久しぶりに受けたら、「あっ！やっぱりこれだ！」ってなったんです。理屈じゃ説明できないんだけど、踊りの基礎はやっぱりバレエだし、やっぱり踊りの中でバレエに叶うものはないし、バレエほど高度な技術を要し、優雅なものはないと思うんです。辛かったことの逃避ではありません。バレエをまた再開したことによって、辛さが全部ではないのだけれど、半減されていったのです。多分バレエじゃなかったら、もっと辛いままだったような気がします。そんなに好きなことなのだから、もっとポジティブな文章になりそうな気がします。なんだろう。ただ好きならば、いいところばかり、バレエのこんなところが好きだとかという文章で終わっていたのかもしれない。文章全体が重いのは、過去の辛かった頃を支えてくれたのがバレエだったというのが、その辛かった部分を強調しすぎたせいかもしれません。とにかく私の中で、辛かったときにまた再開したのがバレエじゃなく他のものであったらその辛さはなかなか克服できなかったでしょう。それほど、私にとってバレエとは影響力の強いものだったのです。

対話2で気づいたこと—私の中で、辛い思い出が蘇った。だけど、何故バレエでないとならなかったのか。他のモノじゃ辛さは克服できなかったのか。自分自身まだ分かっていないような気がした。何故か？ということをもっと明確にしたいと思った。

対話3. バレエに対する誇り、自分自身

H—西川さんは、バレエに対して、誇りをもっている、バレエを続けている自分を誇らしく思う、ということは、ありますか？お答えを読んでいて、そんな感じがしました。

私—誇りですね。今まであまり考えたことはないのですが、持っていると思います。実際今は月1回しか行けてないのですが、続けていることに意義があると思っています。なかなか月1回だと上達もしないのですが、それでも全然やらないよりは、いいと思っています。

H—わたしの友人も踊ることが好きで、バレエをやったり、タップをしたりしていました。ダンスでもバレエでも、踊りをしている人(友人に2人います)は背筋がピンとしていて、性格も生き方もピンとしていて、わたしは2人とも尊敬しているのですが、西川さんもそんなタイプかなあと想像しています。

私ー私は背も小さいし、あまりバレエ体型ではありません。残念ながら・・・でもやっぱり背筋は伸びているのかな？あと体が柔らかく関係ないのかもしれませんが、頭も柔らかい？ような気はします(笑)

Hー身体の柔らかさと頭の柔らかさは、リンクしていると聞いたことがありますよ。

対話3できづいたことーここでは、世間話のような話をした。お互いの周りや日常を垣間見た時だった。Hさんの物腰の柔らかさに親しみを感じていた。

対話4. 過去の辛い経験。そして今

Hー過去の辛かったことって何ですか？

私ーそうですね。私はその当時とっても暗くて、将来のことにとっても悩んでいました。今はそうではないのですが、あの頃の私は全てを否定的に考えている子だったのです。だから、普通そんなこと考えなくていいのに。そんなことで悩まなくてもいいのについていうことで悩んでいたんです。たえず不安にかられていました。人の目をとっても気にしていました。自分に自身も何もなかったのです。まわりが、大学入試を考えているときに、私は大学なんて行く意味あるのかな。なんでやりたいこともないのに大学行くのか。友人はとりあえず大学に行く。学歴のため？今時大学出たおかないと就職できない？から。実は私は歌手になりたかったのですが、どうやってなるのか。田舎で今みたいにインターネットもないし、情報も全くないので、どうやってなるのか分かりませんでした。オーディションもどうやって受けるのかとか。みんな進路を決めて（ほとんど大学）いく中で私だけ取り残されていく感じがしました。進路相談の時もどうしたらいいか分からず、もちろんそんな状態だから、勉強なんてしても大学行く気がないのに。授業もロクに聞いていませんでした。それが一番辛かったことです。くだらないですよ。今考えれば。歌手になりたいことを、その当時の担任に言ったことはあります。だけど、「本気で言ってるのか？」とバカにされました。一番仲のいい親友も「まだそんなこと言ってるの」という始末。みんな現実を見ろといわんばかりです。そう。多分誰も分かってくれないと思って本当にどうしたらいいのか分からない状態だったんですね

Hー「つらかったこと」へのお返事、ありがとうございます。私も遠い昔、高校生の頃は、やはり悩んでいました。自分はどうなるのだろう？何をしたいのだろう？等々。

そういう悩みから目をそらさずにいた西川さんは、えらい！ですね。

そして、今はどうですか？動機文を読んで、また思ったのですが、バレエとのいきさつは書かれています。が、「今」のことがわかりません。かつての悩みは、解消したのか？今は、どうなのか？晴れ晴れとした気持ちで楽しめているのか？やはり、バレエから力をもらっているのか？

私ー「今」はどうなのかということですが、その悩みから「今」は多少なりとも解消できています。ただまだ私のなりたい理想の自分像にはほど遠いです。だけど、あの頃と違うのは努力をしていることかな。あの時はなりたいものになる努力をしていなかった。情報がないせいにして、積極的に歌のオーディションを受けたり、やせようと思ったりだとか。

実は高校3年のとき、歌よりバレエに目覚め、進路を踊りの方向に変えたのです。進路を変えるほど、バレエを復帰してからバレエが私を救ってくれたので、やっぱりバレエに関係することがしたいと、ふつふつと思っていったのです。それで、ダンサーはなりたいたいけど、体形的に無理だと思い、バレエ教師を目指そうと思いました。ちょうど私が受験の時、初めて大学に舞踊科ができる年だったので、そこを受験しようと思いました。決めたのがなんと高校3年の1月とかなので、本当に急です。それまで、バレエの専門学校に行こうと思ってましたから。でもやっぱり大学に舞踊科が出来たのなら大学の方がいいなと思ったのです。あとあとやはり大卒など学歴を考えて。親も安心するし。だけどそこでも私は努力はしたのだけれども、絶対に入ってやるというふうに死に物狂いで頑張りませんでした。とにかくやせないといけないのに、もうそればかりが空回りして、食べてしまうんです。相当ストレスが溜まっていたせいもあるけど、本当に自分は甘かった。そんなんで通るわけがありません。結局私は、来年もう一度そこを受験しようと思い、高校卒業後ちょうど姉が埼玉にいましたから、上京しアルバイトをしながら、レッスンに通う日々が続きました。だけど、受験のときに知り合った子に、「あまり思ってたのと違う。良くないから来年受験しない方がいいよ」と言われました。それで私は希望を失ったのです。親も受験しないのなら、実家に戻って予備校入ってどこか別のところ受けなおしなさい。と言われました。でも私は帰りたいとは思わず、だったら親は就職しろと言うので、就職先を探していたところ、今の会社に出会ったのです。バレエ用品の会社です。私にはうってつけです。そして運よく採用が決まり、今に至るのですが。就職してからもバレエ教師になる夢をあきらめてはいませんでした。だけど、バレエを続けていくうちにまたそういう会社に入った兼ね合いで、色んなバレエの先生や発表会、公演などを見たり自分も出演したりするうちに、バレエは趣味でやった方がいいなと思い始めたのです。自分自身に限界を感じたのです。努力、才能ももちろんのこと、体型もバレエ向きではないし。

私が就職して間もない頃、母親もリストラされて上京してきました。私はこの母親に度重なる苦労や心配をかけてきているのです。本当にすごい迷惑をかけてしまった時、その時思ったのです。バレエは好きだけど、ずっと今のままじゃいけない。稼ぐこともできないし、バレエ以外私は何もないと。母にもうこれ以上迷惑をかけたくないし、将来本当にいっぱい稼いで楽をさせてあげたいと。それで、高卒で資格も技術もなにもないのではいけないと思い、大学受験を決意したのです。社会人入試を受けるため、会社に事情を説明し、毎週土曜日だけ社会人入試対策で予備校に通い、受験をしました。実際予備校に通い始めたのは受験の2、3ヶ月前。時間がありませんでした。だけど、私を期待している母親や、会社の上司も同僚や部下も土曜日休ませてもらって、予備校に通わせてもらっている手前、絶対に落ちるわけにはいかないとしました。人生で1度あるかないかぐらいの努力をしたのです。今思えばその努力をどうして高3のあの受験の時にしなかったのかと思うぐらいです。でも今は後悔をしていません。いいわけじゃありませんが、人生は本当にめぐり合わせで、受験に一度失敗したからといって、全てが終わるわけではありません。

私はこのとき今やらなきゃ私の人生終わるという勢いで努力しました。絶対受かってやるという信念で頑張りました。そして、見事合格したのです。

もうすっかり受験をすると決めたときから今現在に至るまで、バレエは月行けて1回程度。以前のバレエ教師を目指していた頃はほぼ毎日レッスンしていたので、すごいことです。こうして私はバレエから一步下がった位置に今はいます。だけど、バレエをずっとこの先も趣味として続けていくつもりだし、辞めるなんて考えられません。すごく好きなことを仕事にするのってなかなか難しい。だけど、今私は別の夢に向かって努力をしています。あのときのように。忘れもしない合格発表の日。掲示板に自分の番号があったときのあの喜び。忘れられません。やっぱり努力っていいな。くさいはなしやっぱり努力すると報われるんですね。これからも努力。続けたいと思います。

H—長いお返事ありがとうございました。今回で、ほんとうによく西川さんがわかった気がしました。今までなんとなくつかみどころがない、というか、まだ話したくない部分を持っているような感じがしていたのですが、そうかっ—、そういうことだったんだあ！ と思いました。紆余曲折の体験が、けっして無駄にはなっていないと思います。

また、質問です。今、自分のことを素直に話せる友人・家族・ボーイフレンド等はいまですか？ 仕事と大学の両立もたいへんなことです。べつに深刻に相談する必要はなくても、ほっとするひと時を共有できる人がいるということが、生きていくうえで大きな力となると思います。西川さんにも、そういう人がいてほしいと思います。そういう人たちと笑い合っている西川さん、というのを想像しています。簡単な返事でいいですよ。

H—私にはボーイフレンドはいませんが、大切な親友がいます。私が悩んだときに良いアドバイスをいっぱいもらいます。何でも言える親友です。そして家族。母の存在。多少辛いことやつまづいたことがあっても、今は大丈夫だと思っています。支えてくれる人がいる。その存在だけでも、ありがたいことです。

私は人生に無駄なことは何一つないと思います。無駄な出会いもないと。私は今まで大変多くの人と出会ってきました。自分と合わなくて自分から離れていったり、向こうから離れていったりはありましたが、絶対自分が好きな人は離れていかないのです。どんなに例えば携帯をなくした、壊れたなどなって連絡が一時期途絶えても、何らかの形でずっとつながっています。今のパソコン、インターネット、メール、携帯時代の世の中。それだけでは人と人とのつながりは難しいですね。もちろんなくては困るのだけれど。やっぱり好きなものというのは自分が一時離れても、バレエのようについてきてくれるものなんだなと思いました。この授業を通して**H**さんに出会えたことも、本当に良かったと思っています。

対話4できづいたこと—少しずつだが、**H**さんのうまい引き出し方のおかげで、自分自身バレエを再開する前の辛かったことを思い出し、そしてそれがバレエをまた始めたことによって、どのように影響したのか考えさせられた。そしてまた、自分の置かれている今の状況と過去の状況の違いを把握し、他人に分かってもらいたいという思いが強くあられ

た。バレエの前に歌手という夢の話も出てきて、人に分かってもらえなかったという辛い経験を話せ、すっきりした感があった。バレエは自分からやめてまた、再開をすることができた。一度離れても、ついてきてくれるという結論に至った。

こうして、Hさんと私の長い対話は終了した。

対話を終えて

最初は、どんな批判がきても立ち向かって、突き詰めて話をしていこうという姿勢であったが、Hさんと対話するうちに、Hさんは話の引き出し方がとっても上手い方で、どんなことでも素直に返事が出来た。そうして、そこまで話さなくてもいい過去の事情までも話してしまった。おそらく他の人であれば、ここまで内容の濃い対話はできなかつただろう。そういう意味で私は対話のパートナーに本当に恵まれていた。

結果、対話4でバレエはやはり離れていかずついてきてくれたということに至り、問題提起していたバレエと私の関係がやはり恋愛関係、また人間関係に類似していることということと同じであるということが分かった。また、出会いの大切さに気づいた。私が初めて習った踊りはバレエであり、初めて自分が好きになったものとの出会いであった。

この対話は私にとってとても意義のある内容の濃い対話となった。

[結論]

今回私がバレエを題材にしそのことをずっと書いていく過程の中で、自分が大好きなバレエを今一度見直すいいきっかけになった。

そして、問題提起した自分がどん底の時に助けてくれたバレエ。この時バレエでなくてはならなかった理由は1番最初に出会った踊りであるということであったが、1番最初に出会い恋をしたものがバレエであった。要するに自分が初めて夢中になれたものであったのだ。そんなものに再会(開)したものだから、他のことを忘れるぐらいまた夢中になっていたのである。私は辛かった時にバレエにまた出会い立ち直った。バレエが私を救ってくれた。バレエに再会(開)した時、バレエに初めて会った頃を思い出し、小さい頃の楽しかった時の思い出が蘇っていた。それはそれはウキウキしてレッスンは楽しくて楽しくて仕方のなかった頃を思い出していた。それは初恋の人に久しぶりに会う感覚に似ている。

「バレエとわたし」の関係は、1度離れてもついてきてくれてお互いの気持ちは1つであった。そのことが離れてみて改めて再認識させられた。Hさんとの対話を通じて過去を振り返り、私の人生においてバレエとはどういうものなのかを考えさせられ、結果やっぱり私にとってバレエはなくてはならないものであると同時に、これからは人生における良きパートナーとなってくれるであろう。

今回の私が書いたレポートではバレエがただ趣味で、大好きだ！ということだけを述べるというものではなかった。そこには、私の人生の中にバレエというものが常にあり、追っかけ、追っかけられたりしながら、まるで恋愛のごとく。熱したり、冷めたり。だけど、

やめられない。一種の中毒？ともいえる。バレエと共にあった人生。私という人間を語る
ときバレエ抜きには、語れないであろう。そのくらいバレエ私にもたらしてくれた恩恵は
すさまじいものがある。いつでもバレエは待っていてくれる。何かあったら助けてくれる。

今でも私はバレエに助けられている。あの辛かった日々助けられたのと同じように優
しく接してくれる。バレエは私にとって永遠の恋人なのである。

【おわりに】～活動を振り返って～

早いもので、去年の10月からこの活動が始まってもう終わりの時期となった。

正直、最初取るんじゃなかった！と後悔した。というのも5000字から8000字もの膨
大な量のレポートを最終的に提出しなくてはならないこと。それプラス、対話をしなくて
はならない。さらにその対話をこっぴどく報告にし、公開しなくてはならない。
本当に厄介なものを取ったもんだと最初はひどく頭を抱えていた。しかし、実際文章を書
いたり自分のことを他人に伝えたり、表現したりするのが実はそんなに嫌いでないことに
気づいた。元々バレエやダンス、歌などで自分を表現するのが大好きな私にとって苦痛で
はなかったのである。またBBS上での発言や生徒、メンター、先生同士のやりとりをす
るのも見るのも楽しくなっていた。細川先生が番組でも言っていたように、世の中自分と
同じ考え、意見の人なんていない。その通りだと思った。BBSの1人1人の発言だけで
も、色んな人がいるなあとか、色んな考え方があのだなと思った。そして最終的に相互
評価の段階で、まさか私の稚拙なレポートに対してなんと10名の方がコメントを下さっ
て、本当に感激した。1人もコメントをくれなかったらどうしようかと考えていたから、非
常に嬉しく思った。

この授業は他に類を見ないぐらい特殊で、本当に受講した人でないとその大変さ、おも
しろさは分からないだろう。私はこの授業を通じて対話相手のHさん始め、コメントを下
さった方々など色んな人と出会った。そして他の人のレポートを見て自分も気になった人
のレポートに対してコメントし、評価をした。皆それぞれテーマや問題提起は違うものの、
それなりにどれも読み応えがあり、他人の考えている、思っていることと自分との差異に
多少困惑も感じつつ、読んだ後はどれも深く考えさせられる内容であった。

BBSでは、この授業は色んな意見や発言をして活性化していくことが大事だというこ
とで、思ったことは書き込むようにしていた。また他者の意見に関しても同調したり、時
には批判的意見も述べることもあった。私は今まで人を批判したり、非難したり、意見し
たりすることが好きではなかった。逆にされたくもなかった。だけど、今回この授業を通
じて本当にその人のためになることの意見や批判は悪いものではないということが分かっ
た。むしろ、思っていて何も言わない方が罪になると思った。言いたいことを全部言っ
て相手にぶつけるというのではなく、相手の主訴を考え自分の意見を言えば悪意にはなら
ないということ。このことが、「書くこと・考えること」の授業を通して最も1番感じたこと
であった。ある意味、私の考え方を教えてくれた講義になった。

今、全てを終えてみてやり遂げた充実感と少し寂しい気持ちがある。何やかんや言っても楽しかったなど今なら言える。3ヶ月間先生、メンターの方々、そして同じ生徒の皆ご苦労様でした。そしてありがとう。

